

公益財団法人日米医学医療交流財団 アメリカ短期看護研修助成

研修報告書 (2016年度 助成者)

作成日 2016年10月23日

氏名 (フリガナ)	西 美保 (ニシ ミホ)
研修地	アメリカ・オレゴン州ポートランド市
研修期間	2016年10月9日(日)～ 10月15日(土)
所属機関名 身分	聖隷浜松病院 スタッフ

研修は大学での講義に加え6施設を訪問し、その所々の看護師などの話を聞くことができ、毎日充実したものであった。アメリカと日本の国民性や医療システムの違いから生まれている違いもあれば、日本の医療・看護も同じことを行っていると感じる部分もあった。

何よりアメリカの看護師の向上心には驚かされた。妊娠中に資格を取得し、子育てをしながら新しい分野への挑戦まで考えているのだ。看護師免許の取得後の進学率や、資格取得率は日本とは比べものにならないとも思い、そうさせるだけ看護師の地位や報酬は高く、能力をつければ評価され、スキルアップの支援体制が充実していた。病院は良いスタッフを留めておきたいので、進学するための勉強会から学費まで全てバックアップしどんどん勉強に行かせるそうだ。この体制が看護の質の向上や生き生きと目標を持って働くのを促進していると感じた。このような体制にするにはどうすればいいか。形に表わすのが難しい看護を数値化し、アピールすることでサポートを得てきたと言っていた。保険など医療システムが違うので日本で同じ事ができるかといったら難しい部分もあると思うが、出来ないと諦めてしまったら何も変わらないので少しでも良くなるように努力して行きたいと思う。私が働いている病院でも看護指標を作成し看護の可視化に取り組んでいる。数値に表わすことは難しく、正直負担に感じてしまうこともあったが、自分達のためにも行わなければならないとても大切な事だと感じた。ただし、訪問した病院では簡単にデータ化できる仕組みが出来ており、看護師の過剰な業務にはなっていないとのことでそのような仕組み作りや、改善されれば報酬など分かりやすい形で評価されることも可視化への意欲の促進に必要だと思った。

他に印象的で違いを感じたのが看護学生の教育だ。大学で人形や雇った人を使い、実際に小児～成人まで様々な症例・状況に合わせた観察・判断を行い、報告まで臨床さながらのシミュレーション学習が行われていた。さらに、それを他の部屋で他者が見て評価を受け、ビデオ撮影されており振り返りもできる仕組みだった。日本の教育でも色んな取り組みがされていると思うが、学校では机上の学習や技術の実技練習が主で、実習は見学や検温・ケアの実践に留まり、主体的な患者対応や判断まではいけていないように感じる。日本で臨床に出てから苦労して教育していること、例えば日々の業務の中でのアセスメントや報告の仕方などタイムリーなフィードバックが効果的であると認識はしているが出来ない部分をシミュレーションですぐに自分の動きを確認し他者評価を受けトレーニングされているのは素晴らしいと思った。多くの日本人は、人前で発言したりシミュレーションを行うことは苦手だと思うが、とても大切な訓練だと感じ、設備は違っても部分的に取り入れられるので病院での教育の参考にしたいと思った。

違うところばかりかと言えばそうではなかった。例えば、せん妄患者への対応では、看護師の受け持ち患者数が大体3-4人で最大7人と人員配置が全く異なるが(夜勤も人員はほとんど変わらない)、具体的にはシッターをつける、ベッドアラームを使用する、マネージャーやセキュリティーの協力を得るなど声を掛け合っているとのことで、日本と同じ事が行われていた。日本の看護師は上手く時間を使い多くの患者さんの看護や業務をこなしているが、そこが素晴らしいとも忙しさを改善しなければならないところだとも感じた。

今回の研修を通して、知識をつけ専門性を向上するために努力したいと思った。また、そうできる環境を整えていくことが重要であると感じた。オレゴンでの研修はもちろんであるが共に研修を受けた仲間からも非常に多くの刺激を受け、この研修に参加できてよかったと思う。